

氏名(本籍)	おおしまもと お (東京都)
学位の種類	博士(言語学)
学位記番号	博乙第2306号
学位授与年月日	平成19年7月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	日本語連体修飾節の研究

主査	筑波大学教授	Ph. D. (言語学)	竹 沢 幸 一
副査	筑波大学教授	博士(言語学)	砂 川 有里子
副査	筑波大学教授	博士(言語学)	坪 井 美 樹
副査	筑波大学准教授	博士(言語学)	沼 田 善 子
副査	東京都立大学名誉教授	文学博士	奥 津 敬一郎

### 論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、日本語の連体修飾節に関する統語論的・意味論的研究であり、次の2部から構成される。

#### 第1部 日本語連体修飾節総論

#### 第2部 日本語連体修飾節各論－内容補充(命題補充)の関係を中心に－

第1部は、5章に分かれ、まず日本語の連体修飾節を概観し、次に修飾節特有の問題を扱う。

第1章では、連体修飾節の二分類、「内の関係」と「外の関係」に対する批判への反批判を試み、この二分類の妥当性について改めて論じ、この二分類に基づいて日本語の連体修飾節構造を概観する。

第2章では、連体修飾節の統語的・意味的特性について考察する。その中で、まず統語的な制約としては、日本語の節に関し、ほぼテンス形式を分かれ目として連体修飾が可能か否かが分かれることを確認する。

一方、意味的には、(1) 当該の節が真理値をもつか否かによって連体修飾の可否が分かれること、(2) 連体修飾節の基本的な意味機能は「限定」であること、(3) その「限定」には「集合限定」「属性限定」の二種類があり、連体修飾節が基本的にもつ機能は「属性限定」であることを論じる。

第3章では、対比的な「は」が連体修飾節に入る一方、対比的な意味をもたない「は」が連体修飾節に入らない理由について、連体修飾節の基本的な意味機能と、「は」のもつ基本的な意味機能を考え合わせることによる説明を試みる。

第4章では、いわゆる「がの交替」によって現われる、連体修飾節中の「の」について考察する。ここでは、主格を表わす「の」は当該の節が主節に対して構造的に“従”であることを明示するという仮説を提示し、それによって主格の「の」の示すさまざまな振る舞いが説明できることを論じる。

第5章では、「総理が大使と会見の際」のような、「動名詞節」について考察する。ここでは、(1) 動名詞節と動名詞体言止め用法は統語的性質が共通していることを示し、(2) 動名詞は本来的には動詞であり、述語としての機能の発動・抑制は統語的な環境によること、(3) 時の前後関係を解釈できることが動名詞節の成立条件であることを示す。

第2部は7章からなり、日本語連体修飾節構造の中、従来「内容補充の関係」あるいは「同格連体名詞構

造」と呼ばれてきたものを中心に各論を展開する。

第1章では、「内部補充の関係」とされる構造は、主名詞のもつ意味的情報を中心に構成されたと考え、「命題補充」の連体修飾節と位置づけて、次のことを明らかにする。

1. 「命題補充の連体」をとることのできる名詞は、命題形式をもち、「中立命題」「行為」など、その命題形式の中のスロットを補充することのできる節を修飾節としてとる。
2. 修飾節の形態・意味に対する制約は名詞のもつ命題形式の中に示されている。
3. 命題形式は、修飾節の表す事態・状況などによって補充され、派生命題を形成する。

第2章では、「内容補充の関係」において、修飾節と主名詞の間に介在する「という」を考察し、「という」が介在する条件として、次のことを提案する。

条件(1)：修飾節が言語による「表現」行為を経ていることが合意される場合、「という」が必須になる。

条件(2)：「という」が任意である構造において、修飾節の表現形式－すなわち当該の「事態」を修飾節の形で「表現してみるとどうなるか」－を話し手が意識している場合、「という」が介在する。

第3章では「内容補充の連体修飾節」とも深い関係をもつ、「たたり」「悲しみ」などを主名詞とし、これらと連体修飾節との間で因果関係を表わす構造を中心に扱う。ここでは、ともに修飾節が「因」、主名詞が「果」を表わす修飾節構造を作るにもかかわらず、両者の間に統語的特徴、特に「という」の介在可能性に差があることを観察した上で、「悲しみ」などの感情名詞が何故「という」の介在を許すかについて、名詞自身もつ意味的情報に注目して検討する。

第4章では「地震が起こる(という)可能性」のような「可能性」類の名詞に関し、これらを主名詞とする連体修飾節構造に「という」が介在する理由について考察する。

第5章では、以上のような「内容補充の関係」を形成する名詞を、(1) 修飾節に主語が入れるか否か、(2) その名詞の表わす事象を問う場合のきき方がどうなるか、すなわち「どんなこと」できけるか、「どう」できけるか、あるいはそのいずれも使えないか、という二つのテストによる、意味的、統語的な観点から分類する。

続く2章は、「内容補充の関係」と深い結びつきのある、「の」「こと」を扱う。まず第6章では、「の」の諸相を通観した上で、連体修飾節構造との統語的・意味的関連を検討し、現代日本語の「の」を、「内の関係」に対応する「連体の「の」」、代用名詞の「の」、外の関係」に対応する「補文の「の」」に分類し、それぞれの特徴について述べる。

第7章では、補文の「の」と、同じく補文を形成する「こと」について、従来の先行研究を踏まえつつ、両者の対比によって分析を行い、次のような結論を得る。

Sこと：Sは当該の事象のあらまし、即ち、当該の事象から抽出された事実関係を文の形で表わしたものであり、「Sこと」全体は統語的には名詞である。

Sの：「Sの」全体として当該の事象を指示し、「Sの」全体は統語的には文としての性質を保つ。

## 審査の結果の要旨

本論文は、奥津敬一郎、寺村秀夫による現代日本語の連体修飾節構造の包括的・体系的記述を受け継ぐと共に、連体修飾節構造について、説得的な論理によって、それを拡大・発展・深化させたものとして、高く評価させるべきものである。

本論文は第1部第1章では、まず、奥津、寺村による「内の連体」と「外の連体」という連体構造の二分類に対する批判を反批判するが、根拠のある、妥当な見解である。

また、第2章から第5章にかけて展開される議論においても、興味深い指摘が多くなされる。

例えば第3章で扱われる連体修飾構造内への「は」の出現の可否については、早くからその現象が指摘されつつも、従来、その原理について十分な考察が行われていない。この問題に対し、本論文では、「は」と連体修飾構造の機能の本質を捉えた上で一応の解決をみている。

第5章でも、一種の連体修飾の形式ではあるが、限定された環境にのみ現われ、特異な性質を示す動名詞節の考察を通し、節というものが発生する一つのプロセスを解明したものとして注目される。

さらに第2部では、いわゆる「内容補充（命題補充）の関係」あるいは、奥津が「外の関係」の中の「同格連体名詞構造」としたものを中心に、こうした連体修飾構造の諸特徴についての記述が展開されるが、ここでは、先行研究で十分に検討されなかった主名詞のもつ意味的情報に着目して考察が進められる。そしてこれは、連体修飾構造の研究に新たな分析の観点を提示するものであり、研究進展の可能性を広げるものとして、その意義は大きい。

加えて、第2部各章で展開される論考は、そのいずれもが、言語事実の丹念な観察と詳細な分析を踏まえた議論の積み上げによるものであり、その結論にも説得力がある。特に、第2章から第4章までの「という」の出現に関する考察は、主名詞の意味的特徴の丁寧な分類に基づいた新たな分析として高く評価される。また第6章及び第7章で提示される「の」の分類及び「こと」と「の」の使い分けに関する記述的一般化は、先行研究では含まれていなかった範囲のデータまでをも取り組むことを目指した射程の広い提案と見なすことができる。

第2部は、本論文のハイライトを成すものであるが、こうした点で、先行研究を凌駕するものであり、現代日本語の研究に貢献するところが極めて大であると考えられる。

他方、本論文で提示される新仮説・新提案は、現代日本語の記述に基づくものだが、日本語の通時的考察からの裏付けが得られること、あるいは他言語との対照を通したさらなる一般化の可能性が追求されることにより、その妥当性がより確かに検証されるものと考えられる。今後、こうした方向での研究の深化・発展が期待される場所である。

よって、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。